

## 第一回 WEB 国際会議（2011 年 10 月 15 日開催）

### ～シュテンガー教授の発表～

シュテンガー先生 こんにちは、皆様、カンブシュネル教授。それでは講演をさせていただきます。

フッサールの明証性と現象学的洞察に対する所見ということでもあります。普遍数学につきましても、ここで言及させていただきたいと思います。村上さんがおっしゃられたとおりに、今、福島事故の後、こういったことが大変アクチュアリティを持って、今、私どもが対峙しなければいけない問題になっていると思います。原子力事故と直接関係してくると思っております。そのような中で、自然に対してどのような理解をするのかということ、日本とヨーロッパでは違うのかもしれませんが。その一方で、自然だけではなく、技術をどのようにして受け入れるのかということにおきましては、アジアと西ヨーロッパにおきましては違うのかもしれませんが。これは西側から受け入れたのですけれども、アジアにおける受け入れというものが、技術が導入されたときに、これが1対1だったのかどうかわかりません。

それでは、始めたいと思います。デカルトとともに始まった普遍数学の思想は、近代哲学の入口であるとともに、近代の学問概念の入口を刻印するものであります。デカルトに続く偉大な哲学者達が、これらの入口に関わりを持ってきました。フッサールは20世紀の初頭にあつて、近代の学問と哲学についての理解の根本特性を革新し、最も厳密に、その根本特性を受け止め、新たな地盤のもとに設立しようとしていました。

この発表では、フッサールの思惟が、一方で、この近代の根本特性に負っているという点であり、他方、まさにそこからして、ある新たな、今日まで妥当する現象学的探究の思惟の作業を獲得したという点を議論に導入します。前者は、厳密な学としての哲学と理解されます。後者の論点は、後期フッサールとともに学問概念と学問の自己理解の限界という位置づけをもたらし、この内的な危機が、人間の自己理解、したがって、学問の自己理解の土壌としての生活世界の忘却にあると診断を下しました。換言すれば、フッサールの根本関心は、認識する存在としての人間だけではなく、諸々の条件、よりの確には方向づける存在としての人間の構成の諸条件にあったのです。

それでは、私は3つの観点をここで紹介したいと思いますが、1つ目は、デカルト主義と体験の領野および現象の発見であります。デカルトを彼のコギトの命題と方法論的懐疑から考えるのが常ですが、ここで私は、私にとって、より根源的と思えるほかの読み方を提案したいと思っております。デカルトの思惟の端緒は数学の根本経験に基づいており、この経験を方法論的に、また体系的に証明しようと試みました。幾何学と算術学は、古来、

統一されることはありませんでした。というのも、両者に由来する人間の能力は、感性と知性に帰属していて、その根底的な限界、後者における理性の不死性、そして、前者の感性の全領域の無常性を克服することができず、両者は、その相対立する、依拠するところに遡及せざるを得なかったからです。

そこから帰結するのは、《それまでの、感性の上で妥当することは、本当は理性的であることが分かる》という命題です。幾何学の全領野は、形式と形姿、したがって、直観と感性に基づき、算術学の領野においては、数に、したがって、抽象的な数の概念を基盤とし、したがって、思惟の領域に属することが論述されることとなりました。それは、範例としてデカルトの対応論において呈示されています。外見上、架橋できないように見える宇宙の思惟と宇宙の感性との大きな違いが、今や分析的な幾何学だけではなく、すべての領域において架橋できるようになり、ある新たな理性の探究が計画され、その探究は、近代的思惟となるのです。そして、これが出世の経歴を辿ることになるのです。概して理性は、そしてまさに、その根本条件とは、今や探究されうるものであり、その明確な帰結というのは、古来、尊ばれてきた第一哲学が、すべてを包括する絶対的要求をそなえて出現する普遍学としての普遍数学へと導かれ拡張されていきました。それまでのすべての知は、それに対して多くの間違いを含み、分散しており、また、不明瞭な個々の知でしかないということになったのです。

この理性の探究という指導的理念を、再度、果敢に情熱をもって取り上げた哲学者は、フッサールにおいて他にいなかったでしょう。しかし、それは学問と哲学についての自己理解に関する、革新的な徹底した変革を告げていきました。デカルトとともに、その方法論的に導かれた思惟の作業のもと、確実でありえたのは、レス・コギタンスとレス・エグジスタンスの両領域が、それ自体、構造的に相応関係にあることである。このことは、客観的世界の客観化しうる精確さをもたらすのであるが、それが可能であるのは、この世界が、量的な大きさとして見られる場合です。

フッサールは、19世紀に始まる、単に自然科学と精神科学のパラダイグマが正面衝突しているだけではない、大変多岐にわたった精神活動の展開に対峙して、遠心的な放散する様々な力に対して、新たな理性と意識に導かれた求心的な基盤の設立によって対抗するという課題の前に立つことになりました。フッサールは「必要なのは徹底した新構築であり、絶対的な合理的根拠づけの統一における諸学問の普遍的統一としての哲学の理念を満足させる新構築」と述べています。

このことと密接に結びついているのは、フッサールが精神科学と人文科学に要求される見解を取り上げねばならず、その際に、単なる外的な、量化しうる、数学の規則性にもたらしうる知覚や体験だけではなく、とりわけ意識生を開示する内的体験という形式も存在するという見解です。このことは、本質的に、拡張された、とりわけ、デカルトの理性、概念よりも、より深い領域に達しているということが言えるでしょう。

また、ディルタイの体験と理解という、一方で心理学と、他方で超越論的哲学との対置が、

なおもまた続けて促進されたままであるのに対し、フッサールは、両側面の条件構造を問い、そこに主観と客観という相関的原理を見出すことになりました。知覚され得るものは何でも知覚するもの自身という、それに対応するものを持ち、この知覚するものは、この知覚されたものなしに、知覚することはありえないということです。換言すれば、「合理性」と「心理学」との対立の彼方に、フッサールは、言わば探求の眼差しを投げかけ、この眼差しは、体験の特質とその形式、並びに合理性の根拠とその形式の条件構造を徹底した考察にもたらすのである。

その結果として現象学が出現するのであり、その特徴は、最早前提にされている理性とともに研究を行うのではなく、理性そのものを研究テーマにするということです。ここにこそ、現象学的作業の最も重要な歩みがあるのです。この歩みは、現象学を哲学と専攻性の領域を遙かに超えて解放し、現象学を哲学的理性の正当性を持つ継承者として理解することができるようにするのです。かくして明らかなのは、現象学は全近代哲学の隠れた憧れなのです。この憧れの内実は、卓越した深長な意味を持つデカルトの根本的考察であり、ロックの流派にたつ心理主義にも備わっており、ヒュームは、まさに彼自身の研究領域がそのまま該当すると言うのですが、ただし、彼の幻惑された眼差しにおいてと言われなければいけません。

フッサールが既に早期において、彼の第一の『論理学研究』という大きな著作における分析において、このことを特に強調しているのは次のことです。つまり、彼の「純粹論理と純粹認識論の新たな根拠付け」を形而上学と学問論への、また、数学と心理学その他についての徹底的な問いへと結びつけるときです。すべての知と認識のアプリオリな形式と構造への確定は、まだ不明瞭にならざるを得ないのです。つまり、常にある特定の現出できることであるような、現出できることの諸条件をなすものの根本形式はどこにあるのか。そして、この根本形式は他の根本形式とどのように結びついているのかが看取され、指摘されない限り不明瞭にとどまるということです。まさしくこの仕事、すなわち根本形式とその相互関係の露呈、解明、展開が、現象学研究の主要な課題の1つなのです。これは、意識への現象ということになります。この現象というのは、見えるものをそのままにしていくということになります。

それでは、2つ目の私のポイントに移りたいと思います。それは、“明証性”の明証性というものであります。

明証性のトポスは、古くはキケロまで遡る概念史を持つことが明らかにされていますが、現象学的研究と明証性は、相互に密接に結びついており、現象学は明証性に基づいており、明証性は自己証示し、現象学による接近法を通して立ち現れているのです。ちょうどカントにとってヒュームがそれであったように、フッサールにとってデカルト哲学が先導的意味を持つように、既にデカルトにおいて明証性の概念は、基づける役割を果たしています。真理への問いは、確信の明証性への問いとなり、後に、最終的に妥当性の証明への問いと

なります。このようにして、明証性の概念による成果の増長において、近代の哲学概念がそこに反映しているのであり、無論、それとともに、その一面性と空洞化と素朴性も反映しています。

しかし、ここでは、明証性概念の歴史やフッサールにあって、彼の研究の視野においていかに様々な明証性が生じたかを解明することが課題なのではありません。むしろ明証性が明証性になさしめるものは何かを示すことが問題であり、それによって、明証性からして、あらゆる妥当性の意味と、あらゆる論理、あらゆる明証性の根底等が解明され、なぜこれが現象学的にのみ証示されうるのかが示されるのです。

この要求に満ちた命題の第一の根拠は、フッサールの周知の定式化に見出すことができます。「すべての諸原理の原理の位置にあるのは、あらゆる原本的に与えられている直観は、認識の権利の源泉であること、直観において原本的に、いわば、その具体的な現実性において呈示されているすべてのものは、その所与するありのままとして、単純に受け止めるべきである。このことは、いかなる捻出された理論も私たちが誤謬にもたらしすることはできないことを意味します。あくまでも私たちが了解するのは、あらゆる真理は、それ自身、原本的な所与性からのみ汲み取られるということです」。明証性の理論はそもそも存在し得ないのであり、せいぜい逆に、すべての概念はその直観における原源泉へと遡っていかなければいけないのです。

実際のところ、すべてはこの原本的に与えられる直観の問題であるように思われます。この直観は、ある次元を印づけており、この次元は、単なる心理的体験、直観主義、神秘的観取、素朴な実証主義等々が問題になっているのではないかという批判的追及に耐えうるだけではなく、このような問いとは全く無関係なのです。フッサールを継承するとき、直観は常々、単なる空虚な意味思考の感性的で直観的な意味充実とみなされ、それを通して初めて、「対象が単に与えられるだけでなく、自己所与されることが保証されています。確かにフッサールとともにこのような状況を把握して、空虚な志向と充実とは二つの分離した作用のプロセスをなしているのではなく、一つの統一、ある特定の合致の統一であるということが言えます。かくしてすべての認識は、志向する作用と充実する作用の合致の総合なのであり、その対象の相関に関し、思念されたものと、事象にそくしてそれ自体であるものとの統一として、同一化する総合なのです」。認識能力の特徴づけに関わる限り、この分析は正当なものと言えます。ただ、ここで問われるのは、問題はただ認識に関わるのか、何かの真理の客観の認識に関わるのか、それとも、前もってすべての認識に対して、その認識の場所を示唆する現象の自己所与に関わるのかということです。原本的直観というのは、確かに最善な言葉とは言えないかもしれませんが、たくさんの誤解の原因となっています。主観、客観に相関的な状況を強く喚起させるからです。アピールする、あるいはその原因をつくっているからです。

ロンバッハが強調するのは次のことです。現象学のもとで私たちが理解するのは、記述の経過の仕方であり、この記述は、その対象を感性に与えられているものや、自然な態度の

一般命題を通して前もって描かれているのではなく、原本的直観のうちに、そこで見えるようになるものを描出するために、事象そのものに入り込んで、フッサールの言うことなのですが、行くということでもあります。そこにあるのは、現象学的に見ることと客観的観察との間の根本的相違です。客観的な考察はその事象を外から見ており、特定の地平の距離から知覚するということです。現象学的にみるということは、それに対し、事象に入り込むを試み、事象の内なる構築を把握できるようにし、それによって事象がその内的可能性を保っているような構築の謎を発見しようとするのです。

内的可能性というのはハイデガーの概念になるわけですが、そして、問題となるのは、それ自身から自己を示すことになります。これは、稀にしか起こらないかもしれませんが。しかし、まさにこれが、いわゆる外からくる、他に指示されたり、見られたりするもののまさに条件であり、前提なのです。人が事象に外から近づけるのは、その事象とともに何らかのものの中にいるときのみです。人はそれを外から、つまり、客観的に見ようとするとき、いつも既に本質の眼差しによって、自身が占拠されてしまっているのです。人はこの占拠されてしまっていることを、忘れたり、あるいは否認したり、単純にそうとして受け取ることもできます。そのとき、素朴な客観性への盲信が生じたり、あるいは、それを明確にすることもでき、思い込みから明瞭な自己所与性へともたらし、自己の理解の根拠を見ることになり、まさに現象学を行っているということになります。

私には、ここに現象学の自己理解の根本決定的な特徴が描出されているように思える。フッサールの括弧付けやエポケーなどの道具立てが、何らかの实在性を括弧付けするものではありません。そうではなくて、意識生の外側として問われる实在性を括弧付けようとしています。これに対してフッサールの言表があります。「超越するものは、内在的なエゴの内部に構成する存在性格を持つ。考えられるもののあらゆる範囲の意味と存在は、それが内在的でも、超越と言われても、超越論的な主観性の領域に含まれる。外部とは不合理である」。外部への問いは、それ自体が既に意識生の内部で達成された、(これはフッサールのパリの講演の引用であります)、内部で達成された妥当の様式であり、問うものを前提にしています。私が自分の意識の孤島からどのように脱出するのか、私の意識の明証性となる経験として意識の中で起こることがどのようにして客観的な意味を獲得すべきか、という古典的な認識論の問いに対して、フッサールは次のような周知の答えを与えています。

「既に前もって空間世界を統覚しており、自分をそこに置いて自分の外部を持つような空間の中でとらえている。これは、世界統覚の妥当性が、その問いの意味に関して、既に前提にされているのではないのか、他方、それに対する解答が、初めて客観的な妥当性を生み出すにしてもでもある」。強調するまでもありませんが、問題になるのは、超越論的な主観性ないし純粋なエゴなのであり、それは能力として遂行され、その自我は本来、自己の反省という中で、これはあまりうまい表現ではないかもしれませんが、自己の反省の行き来の中で獲得されるのであります。ということで、自我は何か、存在するもの、それから「それ」というように与えられているわけではありません。実はこの超越論的エゴと

理論的エゴの同一化や取り間違いに頻繁に出会うわけであります。そして、思考ということであってもそうであります。また、超越論的エゴがエゴであるためには、もちろん超越論的なエゴでもある必要があります、人が超越論性の基本理論を把握していなければ、このエゴは単なる「es (それ)」あるいは単なる事物となります。それゆえに、超越論的差異を把握するという事は、現象学的な研究の根本前提となります。

あらゆる基本原理としての明証性は、事象がそれ自身として捉えられるときに現れます。つまり、志向性の基本的な前提が明確になるときに現れます。そのとき、現象学的な作業は、その内的構築の仕方と構築法則を解明し、透写することにより、それによって構造の能力と条件を説明することにあります。また、現象がそもそもそれ自身としての固有の分析の跡づけとして参照する構築の仕方、そして、初層の構成、地平の所与性などが、そもそも現象を初めて解放し、それらは単なる事実の所与性を超越するわけであります。現象と事実は、かの超越論的な差異を表現するものであり、それは既に現象学と心理主義との相違において示されるものであります。これがどのように示されるのか、そして、このことが現れ、納得するものとなります。私は事象を見る。そして一方、それに見られる対象でもあるわけです。ということで、これがどのように示されるのかということが納得させるものであります。

私は見る。一方、他方では見られているわけであります。ドイツ語で **einsehen**、理解するという言葉、これはうまい表現で、一方で、物事をわかるということ。そして、他方で物事に入り込むということの意味するわけであります。或ることについて、正しいか間違っているか議論しただすこと。これらすべては全体として明証性を必要としています。思惟と認識も、フッサールによれば志向性の明証性を基盤にしています。「フッサールの決定的な洞察は、現象学においては、意識作用と対象の間の志向的相関が問題になるのではなくて、本質的にその所与性の《いかに》において、意識の帰属性の《いかに》における諸対象が問題になっていること。このようなことを通じて初めて、現象学は所与性の問題に着手できるわけです」。

そして K.ヘルトは次のような、同じようなことを言っています。「所与性の在り方における世界の現出は、この意味で明証に根拠づけられています。この現出が現象学哲学の基本テーマである限り、形式に則して、方法としての現象学は明証性から明証性を導く試みだと言いうことができるわけであります。明証性は哲学の認識の根底となっています。明証性的方法論上の根本な要請と、相関関係の研究という課題の設定は、同じ、根本的な出発点の二つの側面であります」。このようなことは、私の二面性、つまり、現象学の二面性を示しています。

次のポイントに行きますが、生活世界と危機の思惟であります。つまり、フッサールは、生活世界という標題で、現象学が不可避に、根本的な在り方で経験に結合する領域に入っていきます。この概念は、その時代によく使われる言葉であったかもしれません。そして、

この概念をフッサールは認識論的な結びつきを通して、哲学的な根拠としての機能を獲得しただけではなく、あらゆる思惟、そして、経験の批判的な審級へと昇格しました。

私はフッサールの生活世界概念の発展を検証したいわけではありません。この理論は、フッサールが長年温めた理論であることがわかってきます。そして、この概念は、後期思想において初めて付け加えられたものではありません。しかし、そこでは彼の現象学の全体のプログラムにとっての必然的帰結として、緊急性をもって立ち現われてきたものであります。現象学、この名称は方法論的にも、体系的にも、まずはフッサールに結び付けられ、これまで見極められることはありませんでした。哲学そのものの前提の基盤としての生活世界へと行き着きます。生活世界の問題は、まずは非主題的な直観の基盤であり、「先概念的な経験」として機能します。この結果、この概念は哲学的な学問性を獲得し、この学問性は、この生活世界の問題条件を、方法論的、体系的な意図をもって関係づける必要性を持つわけです。生活世界は、学問的な見方では忘れられた意味の層の欠損として現れます。その対立性が特に明らかになるのは、特に生活世界とともに経験の価値と経験的な世界が権利を主張するときであります。

それによると、学問は、生活世界の基盤の上に立ちながら、その根本的な生の有意義性に基づいて理解するのではなく、それにふさわしい態度に則して、(態度ということは非常に重要なフッサールの概念でありますけれども)、把握することはできないのであります。フッサールからこの言葉を取った学者もいます。生活世界が非直観的に、ともに作動していることは長く隠れたままでありましたし、また、生活世界にとって本質的な主観の相対性と同様、学術研究の視野に入らなかったのです。

(回線遮断のため一時中断)

技術的な問題がありました。技術の問題というのは生活世界の一部であります。

世界は、客観的所与性の兵器庫になってしまひまして、その所与性は「無限性」という指標が備わり、そこに向けて研究されるとされうるわけであります。諸学問の進歩は、それにより、前提とされる世界は最終的に研究し尽くされることはないということにおいて、しかし、このことが、研究の勢いを確保し続けることになっていきます。双方にとって不快なことが明らかになるのは、生活世界と客観的—学問的な世界の間、克服できない関係が対置されたときであります。

「生活世界の主観性と“客観的”で、“真なる”世界との間のコントラストは、後者が理論的、論理的な基礎であり、原理的に知覚することはできず、原理的に固有の自己存在において経験することのできないものである一方で、生活世界の主観的なものは、すべてにおいて、その現実の経験可能性によって特徴づけられているのです。生活世界は、根源的明証性の領域であります」と、フッサールは言っています。フッサールの表明は、徹底的に明証的であります。

もう一回引用します。「客観的、学問的な世界についての知は、生活世界の明証性で“根拠づけられて”いる。これは、学問従事者や団体にとって、基盤としてあらかじめ与えられているものでありますが、この基盤の上に構築された建物は、全く新たな、別のものになっています。もし私たちが、学問の思惟に没頭するのをやめるときに自覚することは、私たち学者はやはり人間であり、常に私たちにとって存在し、前もって与えられている生活世界にとともにあるものとして存在するのであり、そうした自覚において、全学問は、単なる“主観的—相対的な生活世界”へと、私たちとともに組み込まれることになる。」ということです。

欠如した生の有意義性と哲学的な不徹底さ、そして、客観的学問の素朴性に注意を向けるということにこそ、生活世界の批判的な刺の役割があるのです。この要求が考慮されないとき、生活世界の条件性は、学問的な把握可能性の客観的な側面にずれ落ちてしまい、“生活世界”から“客観的世界”が成立してしまうことになります。そこから学問的相対化という帰結を、それぞれの生活世界的な自己了解という一つの根本特性として導き出されない場合、この主張は、一般的な前提の地盤として、それ自体が客観化されてしまうことになります。これに対応する主観の相対性は全く考慮されず、学問の客観性に対する信仰が正当性を持つように見えてしまいます。

学問のそれぞれの生活性への根づきが見届けられるとき、生活世界は常にその都度、主観的、また文化的に与えられています。すべての学問的認識の生活世界的な根拠づけへの歩みが納得しうるものとなる。そればかりか、その相互の結合性と依存性が、現象学に求められるテーマとなります。周知の「ガリレオに関する諸節」、これは第8節、第9節であります。まさにこの点において、その本来の活用領域を持つことになるのであります。これは、ガリレオパラグラフのコンセプトでありますけれども、ここに、本来のところに戻るわけであります。

経験の次元のほか、生活世界は、特にフッサールが、表層的な生と深層的な生を区別することで特徴づけられています。表層的な生でフッサールが理解するのは、カントにその着想を持ち、自然科学的な刻印を持つ思惟構造であり、それは、すべての現出を「何かの現出」としてとらえ、その何かは、もはや現出することはないとする思惟構造です。それは当然なことであり、問題化し問う対象ではありませんが、前提になっています。

もはや現出していないものは、アприオリなカテゴリー性において一度確定されてしまい、したがって自明なものとして、また、もはや問えないものとして前提にされているものであります。そのようにしてすべての学問研究は、経験的なものと現出するものに注目し、この見方が、理念化や無限性に基づく進歩の信仰や表層的意識に等しいとは見ていません。この意識が、たえず新たな成果と諸内容を時間化するものであっても、その根本的な傾向に同一にとどまっていることを見抜くことはできないのであります。

福島に関して、私の考えることでありますが、ときおり立ち現れるのが、論理的、倫理的な、道徳的な問いかけや疑念は、学問の取る態度が、このことに本当に触れることができ



ないことを示唆する第一の印であります。これはいつも出現してくる問いであります。つまり、倫理性であります。しかし、どこからこのような問いがくるのでしょうか。これは、皆さんから出てこなくてははいけません。つまり、私どもは学問的なプラットフォームから来なければいけません。表層的な生というのは、無限に豊かな深層の次元でありまして、これに気が付いていません。

フッサールの全体の、(後期に顕著とは言え)、努力はすべて、いわゆる客観的な、学問的世界の顕在的な表層的生に対し、主観的、相対的、生活世界の潜在的深層の生を対置させること、すなわち、全ての認識の潜在的な深層の領域に注意を注ぐことに向けられているのであります。

しかし、フッサールから非合理主義、あるいはそれに類似したものを引き出そうとするのは完全に誤解です。それと反対に、生活世界を位置づけるためには、次のような考えを強いられます。つまり、諸学問は成長する人間性のためにこそ登場しているということであり、これはデカルトでも決定的なことでもあります。これは理性の自己理解と自己探求においてこそ、言い換えれば、探求に固有な諸条件にこそ、その本質があることを意味しているわけです。したがって、フッサールにとって問題になるのは、生活世界にとって重要な『危機書』(ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学)の第34節にあるように、生活世界の学問であり、つまり、単なる学問と学問性ではなく、また、どのように理解されようとも、学問外の、また前学問的な生活世界の概念ではないのです。

試みに、このように言うことができるでしょう。深層の生は、理性としての主観の側面、人格の自由、そして、歴史性において、また、意味としての客観の側面、文化的、歴史的創作活動としての生活世界に基づいた文化的生としての客観的な側面に描き出されます。この深層の生の言わば固執性は、相関的な構造、人格として、フッサールはいつも人間として共生することの地平と言いますが、この地平や現存する他者との結びつきが現れるのであります。深層の生は、それにより歴史の次元が語られることになりませんが、単に深い、そして、次元的に際立つ深層を露呈しうるだけではなくて、つまり、ノエシスーノエマの志向的で相関的な根本構造をも、すべての多様性の中に指し示すことができ、これが単に知覚と認識の領層だけではなく、感性的で身体的、人格的で、そして、倫理的、文化的、歴史的な領層でどのように出現するかが示されうるだろうと思います。すなわち、深層の生としての生活世界の現象とともに、すべての哲学や学問性に、そして、潜在的で批判的な審級が形成されるだけではなく、その生成と発生の証示に寄与することができるわけです。これは、フッサールの哲学の内的な推進力であるというふうには言えると思います。これは一般的、あるいはユニバーサルなことと聞こえるかもしれませんが。

さて、近代、現代の哲学的な学問概念は、含蓄的契機として危機を担っているだけでなく、真っ直ぐにこの危機に向かっていると言えます。学問的な概念が危機をつくり出しているわけでありまして。生活世界は批判的な叫びであり、その叫びは下から起こり、上からの理想化に対抗しています。生活世界は、見かけの上で客観的な学問的な世界を、その経験の

諸前提に戻るように要請し、この諸前提は原創設ということですが、その客観的な学問世界に、その習慣性（主観特性）と沈殿化（客観特性）の形式において、その前提になる諸層を指摘します。この前提なしに、学問は学問として活動し得ません。たとえ生活世界概念が超越論的—主観的に結びつけられたままだとしても、その超越論的な概念構造を生活世界の経験の必然性へと乗り越えていくわけであります。誤解がないように申し上げますけれども、これはカントと違ったフッサールの特色であります。フッサールは、生活世界の経験の領野を彼独自の現象学的なテーマとして掲げることにはできませんでしたが、まさにそのスタートの舞台を構築したわけであります。

ということで、これは文化領域を超える、そして、グローバルな理解を示す一つの兆候であるというふうに言えると思います。ご清聴ありがとうございました。